

明治時代の学校建築から見えてくる教育思想・文化

—長野県内に現存する学校11校を事例に(その一)—

(平成27年8月31日受付, 平成27年10月20日受理)

Educational Thoughts and Culture Revealed from School Architectures of Meiji Period

—Case study of eleven existing schools in Nagano prefecture— (Part 1)

奈良学園大学人間教育学部

中田 正浩

NAKADA Masahiro

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：寺子屋, 明治維新, 学制, 学校制度, 学校建築, 擬洋風建築

Abstract : As educational establishments of the early modern period, Shoheizaka Gakumon-jo for buke (samurai) education that was under the direct control of Edo bakufu, 'han-ko' (feudal domain schools) of each domain, and private schools and 'terakoya' (community schools) for general people were established. The education of Edo period was based on the educational thoughts and culture formed in 250-plus-years of Edo bakufu, and it is not the same as the modern education of the West. However, the modern education was, in the rapid modernization driven by Meiji government after the Restoration, taking the western education as a model, but at the same time built on the foundation of the education of Edo era and its tradition. This article is to conduct research (May 22 - 24, 2015) on the existing elementary school architectures (eleven schools) in Nagano prefecture that were built directly after the 'school system' had been issued, and to overview the educational thoughts and culture of that time through collections of the materials and interviews to the curators.

Keywords : terakoya, the Meiji Restoration, educational system, school architecture, Western-style building

1. 近代以前の信濃の教育

江戸時代の教育施設としては、武士の子弟のために文武の教養を積むべき幕府直轄の昌平坂学問所や全国各藩には藩校が設けられた。庶民には、日常生活に必要な教養を求める施設として私塾や寺子屋などに、特に武士と庶民とは区別されていたことは、長野県内においても同様である。

この様に近世における教育は、武家の学校と庶民の学校とが別々に設けられ、二系統の学校が並立しながら、各々独自の発達をした。江戸時代には、その他の教育施設として私塾(国学・洋学・医学など)の教育

施設も発達した。しかし、江戸時代末期には、それぞれの教育が次第に接近して両者の融合化が図られることになった。

近世の長野県における農村社会は地主と小作人との階級社会を生み出していたが、生活に余裕が生じてきた地主たちは、特に元禄・享保年間に余暇として和歌・俳句を嗜むと同時に、心学や国学を学ぶようになった。

このように信濃の町や村に教養・知識をもった人々が、和歌・俳句に止まらずに、身近なところの歴史・地誌の研究に従事する者が出てきた。また、時を同じくして江戸・京都等で国学や心学を学んだ門下生が信



写真1-1 藩校：文武学校（松代藩）

濃に帰郷して、著名な学者による学舎が開かれたりすることで、信濃に多くの教養人・知識人を生み出す原動力にもなった。



写真1-2 寺子屋手習いの様子

この近世(幕末期)における文化の広がりには、信濃の各藩に藩校が設立されると同様に庶民の間には寺子屋が設立された。「日本教育資料」によれば、全国各地に開設された寺子屋の総数は、1万5千余りに達するといわれている。信濃における寺子屋数は1341で、埴科郡でも研究者によって38や86,155などの諸説がある。しかし、信濃地方の寺子屋の普及度は非常に高いものがあつたと推測される。

その寺子屋の師匠であるが、信濃地方の農民上層の教養が進んでおり、彼らが師匠になりえたと思われる。

その寺子屋では、手紙の書き方などを初歩学習用に編纂された『往来』教訓書、歴史などが現在でいうところの教科書として使用された。

寺子屋は藩校と比較すると、庶民が日常生活に必要な読み・書き・そろばんなどの基礎学力の大切さを自覚して子供に通わせ、庶民の積極的、主体的な学習によって支えられた教育機関であるところに、現代を含めた教育史の中で重要な意味を持っている。

今回、事例として取り上げた長野県内も江戸時代は

前述したように、藩校と私塾・寺子屋による教育機関が“信濃教育”の基盤を作り上げたといっても過言ではない。これらの教育基盤があればこそ、「学制」が引かれた直後に、県内各地に小学校が誕生したのである。

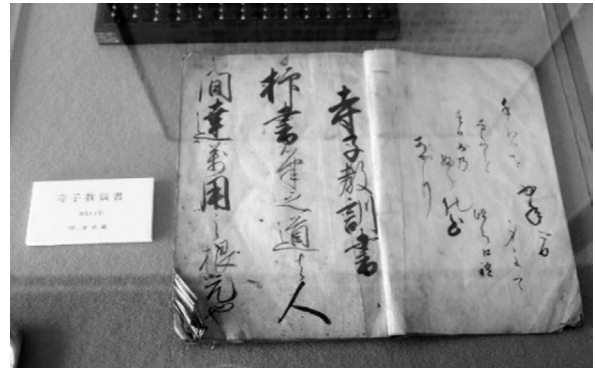


写真1-3 寺子教訓書

2. 「学制」発布後の教育

1872(明治5)年の「学制」発布直後の小学校は、江戸時代の寺子屋に代わり初等教育機関として誕生したのである。

文部科学省の「四 小学校の普及と就学状況」によると、学制発布後各府県のとった小学校開設の方針には、「第一は従来あつた寺子屋・私塾等を全廃して、新しく小学校を設置したもの、第二は寺子屋・私塾等をそのまま存置して、これとは別に公立小学校を設け、しだいにその中に生徒を吸収し、徐々に古い形の教育機関を整理する計画であつたもの、第三は寺子屋・私塾等を学区制に基づいて併合して、そのままこれを小学校に再編したもの」と三つあつた。(太字・下線部は筆者によるもの)この中で、全国的には第三の方針を取つた地方が多かつたようである。

この時期(学生発布直後)に設立された小学校の多くは、従来の寺子屋・私塾・郷学校などの庶民教育機関を母体にしたものであつた。

「学制」は、欧米諸国の教育制度を基盤に作り上げた日本で最初の近代的学校制度を定めた基本的な法規である。その「学制」の目指す趣旨を、1871(明治4)年「学制」は、全国を8大学区に分け、各大学区1校を置き、その下に中学校256校、小学校5万3,760校を設けることにした。これは、日本国民の子弟全てを収容できる規模であつた。

ここで1875(明治8)年文部省第三年報付録には、「小学校数は2万692校で、そのうち8257校(約4割)巔々寺院を借用したものであつた。次いで6794校(約3割)

が民家を使用していた」と記述されている。1)

このように、明治政府による学校開設の号令はあっても経済的援助はほとんどなく、校地の確保や新築費用の捻出には苦労があり、とりあえず寺院等を借りて開校したのが実情である。

3. 長野県内における明治の学び舎 ～近代学校の発足～

長野県内には、現在のところ明治時代から約150年経過しているが、未だ明治時代に設立された小学校(表1)が残存している。

表1：長野県内における現存する学校11校一覧

	校名	設立年代	住所
①	旧座光寺麻績学校	明治6年	長野県飯田市座光寺2535番地
②	旧中込学校	明治8年	長野県佐久市大字中込1877
③	旧開智学校	明治9年	長野県松本市開智24-12
④	旧格致学校	明治11年	長野県埴科郡坂城町中之条2426-1
⑤	旧和学校	明治12年	長野県東御市海善寺1244-1
⑥	旧園里学校	明治16年	長野県須坂市大字豊丘1076番地
⑦	旧作新学校	明治16年	長野県長野市稲里町下水鉄鉤
⑧	旧山辺学校	明治18年	長野県松本市里山の辺2930-1
⑨	旧屋代学校	明治21年	長野県千曲市大字屋代2111番地
⑩	旧下市田学校	明治21年	長野県下伊那郡高森町下市田1043-1
⑪	中野小学校旧西校舎	明治26年	長野県中野市大字一本木495-6



図1：長野県内地図

下記の記述は、その残存している 11 校の近代化された初等教育施設建設に向けた地域住民の協力和大工棟梁の活躍した概要及び学校建築までの経緯を述べたものである。

① 旧座光寺麻績(おみ)学校



写真 3-1 旧座光寺麻績学校校舎

学校は、麻績神社の大鳥居をくぐり石段を登り切った左側に「舞台校舎」とよばれている旧座光寺麻績学校校舎が目に入る。本校舎は、明治 6 年に歌舞伎舞台と学校との兼用で建てられ、長野県下でも一番古い学校である。

大屋根の棟には建設当時の校名「麻績小校」が記されており、1984(昭和 59)年まで百十一年間、学校として活用されていた貴重な建物である。

また農村の歌舞伎舞台としては県下最大級で全国的に珍しいものである。

明治当初の座光寺は筑摩県(長野には当時長野県と筑摩県の二県が存在していた)と呼ばれ、権令(県知事)の永山盛輝は、「学制」発布(明治 5 年 8 月)以前の 1872(明治 5)年 2 月に「学校創立告諭」を布達し、6 月には如来寺で筑摩県第三二小校が開校された。

座光寺地区は、江戸時代から国学の非常に盛んな地域であり、寺子屋が数多く開かれるほど教育熱心な村であった。村では、「権令の御触れ」をいち早く取り入れ学校を創るべき動きが生じたのである。

しかし、旧座光寺麻績学校校舎に歌舞伎舞台を併設したのかといえば、当時、長野県内(特に飯田下伊那地方)の村々では、神社の境内等に舞台が数多く造られた。なぜこのように舞台を造ったのかといえば、当時地芝居と呼ばれる歌舞伎や人形芝居が流行し農村における娯楽といえば、歌舞伎や人形芝居しかなかったからである。

さて、旧座光寺麻績学校校舎は木造二階建、一部三階建、棧瓦葺入母屋造で、正面一階は歌舞伎舞台、二階は教室として計画された。一階正面には長さ八間の

梁を渡し、その左右の太夫座・下座部分には二段の格子窓がある。舞台裏は一階が土間床、二・三階は畳敷きの部屋となっている。

とりわけ村の青年層が、積極的に学校建設に協力した。また建築資材として高岡の森から 22 本の杉を切り出し、もちろん村中から木・米・竹・石・瓦・土地等はもちろんのこと、お金などの寄付が寄せられた。当時の村の人口が 1,500 人程度であったが、校舎建築のお手伝いをしたのが、延べ人数で 8,282 人であった。

校舎の正面に位置する梁(梁の長さは 8 間=約 14.5m)は、飯島村(現在の上伊那郡飯島町)から切り出され、天竜川を流し下ってきて、南大島川から高岡を経由して村中総出で引き上げられた。

村民から建設資金を拠出してもらったのだが、完成時には 900 円(現在の貨幣価値に換算すると 1,057 万円程度になる)余りが不足しており、その後借金を 10 年かけて返済したのである。

② 旧中込学校



写真 3-2 旧中込学校

旧中込学校は、1875(明治 8)年に建築され、日本に現存する擬洋風建築としては、最古のものである。

1873(明治 6)年に下中込村は今井・三川田両村と組合立として村内の小林寺を仮校舎にあてて旧中込学校の前身である「成知学校」を創設したのである。

1874(明治 7)年に村民協議のうえ学校を新たに建築することとなり、アメリカで西洋建築を学んだと伝えられている市川代治郎棟梁に設計と建築を依頼した。当時、建築に要した費用は 6,098 円 51 銭 8 厘で、その大半を村内有志の寄付によるものであった。これは、長野県の小村としては画期的な試みであるとともに、村民の教育に対する情熱の発露である。

「座光寺麻績学校校舎」の建築費用も同様に、村民

の寄付行為により創設されたことについては述べたところである。このように建築費用を村民が負担するのは「なぜなのか？」と言えば、当時の明治新政府が教育に関わる費用は民費負担という方針によるものである。

旧中込学校の特徴は、日本の小学校建築としては特異な構成をしており、正面から見て松本の旧開智学校などのように横長でなく、縦長でその前面にベラがついている。またガラス窓がたくさん用いられ、特に一階の半円形の欄間と2階中央廊下の丸窓はステンドグラスがはめ込まれており、当時の人々から『ギヤマン学校』と呼ばれていた。さらに、校舎上部には、八角形の塔があり、その塔の天井中央から太鼓を吊るして時を告げたので「太鼓楼」とも呼ばれた。

太鼓楼の天井面には方位図が描かれ、中央に佐久の地名、次に八方の山の名が、次に直江津・水戸・東京・清水など国内の都市の名、さらにその外側には外国の都市や山の名が記されている。この取り組みは、山国の子どもたちに地球的規模の視野を開かせようとした当時の教育者の思いを直に感じることができる。

③ 旧開智学校



写真3-3 旧開智学校

開智学校は、1873(明治6)年5月6日に全久院という廃寺の建物を利用して「第二学区筑摩県管下第一中学区大一番奨学開智学校」として開校した。校名の由来は、学制の序文「智を開き」から(「……身を修め智を開き才芸を長ずるによるなり……」)命名されたと言われている。

校舎は、1875(明治8)年4月に起工し、同9年4月に竣工した。構造は、木造・棧瓦葺・寄棟・二階建・土蔵造・中央部八角塔屋附の擬洋風建築である。

1876(明治9)年の新築当初は、現存の校舎に7間(12.6m)×33間(59.4m)の教室棟(明治8年中に完工)が逆L字型に配置され、総面積2,653㎡の規模であった。

開校当時の教員は33人、生徒は1,051人という大規模校で、これは、江戸時代の松本藩校崇教館とその後進の筑摩県学から続く、教員や組織の基盤があったことが大きかったようである。

教科は、読本課・算術課・習字課・英学課が設けられた。英学課は、和訳翻訳やリード(=リーダー)の授業だけでなく、万国史(=世界史)や理科などの学修も行われていた。県下で開智学校のみという先進的な取り組みであった。英語課は後に中学校に発展するように、高度な内容の授業が行われていた。

当時、甲・乙・丙の3クラスが設置され各々のクラスで読本・算術・習字を2時間ずつ学習していた。昼休み1時間をはさみ、9時から16時まで授業が行われていた。

近代的な校舎の中で、西洋の教材(教科書もほとんどが啓蒙的な欧米の翻訳教科書)を取り入れた授業が開始されたが、教科書が児童全員にいきわたらず、集団で見ることが可能な掛図によって授業が行われていた。ノートや鉛筆の役割を果たしていたのが、石盤と石筆である。

現在、小学校の教科の一つである図工は、明治時代に誕生した際は「図画」という名前であった。近代小学校制度を定めた学生の中でも、図画も授業の一つとして挙げられている。開智小学校でも、明治23年には全ての学年で図画の授業が行われていたことが、当時の時間割から明白である。

④ 旧格致学校校舎



写真3-4 旧格致学校校舎

1872(明治6)年、旧埴科郡中之条村と横尾村の組合立の学校として、中之条村の「西念寺」を仮校舎として出発し、1878(明治11)年には、中之条村一行寺跡(現

在の中之条雇用促進住宅南側付近)に工事費 1,381 円余りを費やして完成した

校舎は、二階寄棟造棧瓦葺、一階四注造棧瓦葺の木造建築で、梁行桁行は一階 10.07m × 21.84m、二階は 6.36m × 18.18 m²である。

建築様式は西洋の建物と昔からつくられてきた日本の建築を合わせ持つ洋風建築で、明治時代の始めに西洋の人たちが多く住んでいた建物の形に似ている。

一階には、教場 5、事務室、面謁所、教員休憩所、生徒控室、二階には試験場と教場があった。正面中央にあるアーチ、ガラス入りでガラリと呼ばれる細い板をはめ込んで作った開き戸を持つ窓、板を重ねて張り、ペンキを塗った下見板(腰板)、石造の基礎及び塗装の色合いなどに西洋のイメージが感じられる。逆に瓦葺の屋根、漆喰塗りの白い壁は日本の伝統的な造りとなっている。

「格致学校」の校名は 1874(明治 7)年に命名され、「格致」とは中国の古典である『大学』の中にある「格物致知」という言葉から引用されている。物事の道理をきわめて、自分の知識を完成するという意味である。明治時代の三筆と言われた巖谷修が揮毫した「格致学校」の扁額が残されている。

⑤ 旧和(かのう)学校



写真 3-5 旧和学校

1871(明治 5)年、学制が敷かれた当時の和(かのう)地区は近世から継続された八ヶ村に分かれていた。1873(明治 9)年に和(かのう)村が誕生するまでに五ヶ村で共立学校ができた。この共立学校には、東上田・東田沢・栗林・神深井の核村の子弟が就学し、中曽根・海善寺両村の子弟は本海野の進善学校へ、下深井村の子弟は蒼久保の知新学校へ修学した。その後、1873(明治 7)年には共立学校から東上田学校、東田沢学校が独立し、学校が急に増加した。しかし、そのほとんどがいわゆる寺子屋式の学校であった。1879(明治 12)年 10 月、一村一校の和(かのう)学校として統合された。

村のほぼ中央の現在地に開校された校舎である。

前述の旧中込学校・旧開智学校・旧格致学校は、明治の欧米文化移入の影響で洋風であるが、旧和(かのう)学校は和洋折衷で屋根は寺社風の入母屋造りとしている。

これは後に“和教育”と名を広めた、心は和(日本)知識は西洋(欧米)といった「和魂洋才」の教育理念によるものである。堂々とした構造は全体に堅牢で百年を経ても状態が良好であり、また、一部の明かり障子をガラス窓にしたほかは、ほぼ原形を維持している。

建築の形式として、木造二階建、屋根二階棧瓦葺入母屋造、一階棧瓦葺四柱造である。

規模は一階梁行 10,908m(6 間)、同桁行 27,27m(15 間)。二階梁行 7,272m(4 間)同桁行 23,634 m(13 間)で、延面積は 469,72 m²(142 坪)である。

⑥ 旧園里学校



写真 3-6 旧園里学校

1873(明治 6)年に小山村(現 那須市大字小山)の止善学校の支校が灰野村(現 須坂市大字豊丘)の地藏堂に開校した。1877(明治 10)年にはこの地藏堂が焼失したため、寺久保の観音堂を仮校舎として授業が再開され、1878(明治 11)年に平屋建て 40 坪の校舎が現在の豊丘地域公民館の場所に新築された。1879(明治 12)年には止善学校から分離独立して競進学校(就学人員 50 名)と改称し、さらに 1882(明治 15)年には園里村立園里学校(就学人員 110 名)と改称した。

この校舎は、児童数の増加によって手狭となったため平屋校舎の増築として、1883(明治 16)年に建設された。校舎は、擬洋風建築の概観で、上下式の窓、六角形の太鼓楼を乗せた玄関などがあり、その玄関は、外壁を土造りにし、その隅の部分には漆喰を盛り上げて隅石を表している。また、玄関の柱は木製円柱に筋彫りを施した洋風で、古い記録によると、玄関の上には、六角形の塔がついていた。旧園里学校は、明治時代前期の小学校建築としての特徴を今日に伝えている。

⑦ 旧作新学校



写真3-7 旧作新学校

旧作新学校は、当時の普請係早大の留書によると、
用材は旧信田村の田ノ口(現在の信更町野口)より切り出されており、また請負った大工は、当時最も西洋建築が多く新しい技術の伝わっていた横浜へ行き、洋風建築を学んだ上で建築に当たった。

建築構造は、間口8間、奥行6間の木造総二階。瓦葺寄棟造で、四方の壁を漆喰塗とし、西洋窓をつけ、また正面中央に和風の玄関を有する擬洋風建造物である。

一階は、玄関に続く廊下の左右に二部屋、つきあたりの廊下を挟んだ南側の大部屋は職員室にあてられており、二かのにの四部屋は、三つの教室と応接に使用されていた。

現存する校舎は、現在内装に改装が見られるが、間仕切り、外装は1883(明治16)年建築当時のまをよく残していて、和風を取り入れた擬洋風建築として、当時の学校建築様式を知る上に貴重な建物である。

⑧ 旧山辺学校



写真3-8 旧山辺学校

旧山辺学校は、1885(明治18)年に校舎が建てられ、翌1886(明治19)年に開校した。校舎の正面玄関は、洋風建築のシンボル・八角塔で、旧開智学校に似ている。同じ洋風であっても、旧開智学校が、西洋から輸入した高価なガラスや色ガラスを使用した「ギヤマン校舎」と呼ばれていたのに対し、この山辺学校は障子を使用していたので、「障子学校」と呼ばれていた。障子以外にも、屋根の形や白壁など日本の伝統建築様式が取り入れられている。開校当時の山辺学校では、6歳から14歳までの児童たち約350名が14の学級に分かれ、14名の先生方に指導を受けていた。

正面玄関の入口を入ってすぐの左下には、「鈴」と「石盤」があり、「鈴」は今のチャイムと同じ役目を果たしていた。授業の始めと終わりに、廊下でこれを振って歩いた。「石盤」は今のノートで「石筆」で書き、布で作った拭きもので消して使用した。

⑨ 旧屋代学校



写真3-9 旧屋代学校

この建物は、1888(明治21)年の建築で、明治時代中期の学校建築の様式を示すもので、長野県内でも数少ない貴重なものである。

屋代尋常小学校の前身は、1873(明治6)年屋代宿の旧本陣に開校したが、時が経つにつれて手狭となり、松崎問屋に支校が置かれるようになった。

やがて、本格的な学校の建築を求める声が上がった。1888(明治21)年若林忠之助町長の時に、現在の屋代小学校旧本館が屋代尋常小学校の校舎として新築された。

旧本館は、木造二階建てで、正面玄関に突き出した車寄せを設け、その屋根の破風を彩色した花と唐草で飾り、円柱を立てている。階上は高欄付ベランダとし、四隅に飾り持ち送りを入れ、網代天井としている。また建物外壁を下見板張りにしてペンキ塗装を行い、窓を洋風窓としている。屋根は、伝統の入母屋棧瓦葺に

しており、こうした洋風建築を「擬洋風建築」と呼んでいる。

内部は中廊下とし、教室を両側に設けるのは、当時の学校建築の一般的な方式である。

⑩ 旧下市田学校



写真3-10 旧下市田学校

下市田学校は、1873(明治6)年4月15日、訓蒙小校として安養寺本堂を仮校舎として開校し、その後1875(明治8)年11月27日、現在の場所に校舎が建設され、同年12月に下市田学校と校名が改称された。

ところが1986(明治19)年3月8日、火災により惜しくも焼失した。しかし、村人の教育への情熱は高く、学校再建に立ち上がり、1888(明治21)年2月19日に新校舎が完成した。

建物の特徴は、木造二階建て寄棟屋根瓦葺きで、建物の正面中央に玄関が設けられ、玄関も2階建てで唐破風という寺や神社の建物に見られるような形の屋根が乗っている。壁は白い漆喰塗りとして、一階の窓下はナマコ壁という土蔵づくりによく使われる技術が使われている。

⑪ 中野小学校旧西校舎



写真3-11 中野小学校旧西校舎

幕末から明治初頭にかけて、中野地区には28の寺子屋があり、師匠による独自の教育が行われていた。

1873(明治6)年、研智学校が開校し、本校のほか西

条志校と若宮支校を置いた。明治15年、教育令が改正され、研智学校は中の学校へ発展した。1886(明治19)年4月「小学校令」が公布され、1町村1小学校の原則により、中野学校を廃止し、就将学校の西条・小田中村分、憲徳学校の一本木村分、愛育学校の岩船・吉田村分を統合し、新たに組合立中野学校を設立した。

本校を旧陣屋跡に、分教場を鈴泉寺においた。同(明治19)年の児童数は527人を数える。

1889(明治22)年4月、町村制が実施され、仲ノ町、西条村、一本木村の1町二カ村が合併し新しい中野町として発足した。これに併せて組合立中野学校は中野尋常小学校と改称され、小田中村は合併して日野村となり、日野尋常小学校へ、岩船・吉田村は合併して平野村となり、平野尋常小学校へ通学することとなった。

1892(明治25)年、中野尋常小学校は小田中の児童を編入し、1896(明治29)年には、現在の学校位置に校舎を新築移転した。

同(明治29)年、中野尋常小学校の校舎として現中野小学校敷地内に建設されたものである。

建物は、明治中期の西洋建築の特色を残しており、玄関は寄棟造りの屋根を乗せ、二階にテラスを設けており、側柱の左右は角柱を主柱として、両脇に丸柱二本を立てている。柱は贅沢な装飾柱で梁を支えている。

また大屋根中央日に取り付けられた朱色の一つ星の屋根裏部屋は、明治天皇・皇后の御真影が掛けられた特別な部屋であった。

4. 学校設立にゆかりの人々

前述したように長野県内には明治時代の小学校11校が残存している状況及び創設過程について概観してきた。それらの学校は創設されたのは、明治6年から明治26年までの長期間にわたって各々創設されたものである。

封建社会の江戸時代が終わりを告げてから、わずかな時間で日本各地に小学校が創設されたのである。しかし、それらの学校は決して大都会に作られたのではない。概観をした11校全てを筆者は、調査のため訪れたのであるが、一部を除きそれらの大半は、のどかな村落の中に建てられていたのである。

このように長野県では、明治維新の直後、その政府は教育に係る費用は民費負担という方針(建築費に

については国・県の補助はなし)の中、なぜこのように当時の戸長や学校世話役の献身的な努力並びに地域住民の深い理解と協力とが一体となって建築されたのかを、次の3つの視点から見てみたい。

① 行政担当者

1) 永山盛輝



写真4-1 永山盛輝

ここでは、開智学校と旧座光寺麻績学校の創設に尽力した筑摩県令の永山盛輝について見てみたい。

永山盛輝は鹿児島県の出身で、初代の筑摩県令(現在の知事)として筑摩県に赴任した。

永山は、明治政府の重鎮大久保利通系に属する鹿児島県士族で強力な藩閥官僚でもあった。

彼は、1872(明治5)年8月に明治政府が出した“学事奨励に関する「被仰出書」”よりも先に「学校創立告諭書」を發し、筑摩県学を開校した。このことからしても、教育県令と呼ばれるほど永山の教育に対する熱意と献身的な行動を見て取れる。開智学校の子供達とともに、県内の町村を巡回し模範授業を行い、人々に教育の重要性を説いてまわった。この時の様子を長尾無墨が『説諭用略』にまとめ、県内に配布した。その結果、筑摩県の就学率は全国一と呼ばれることになった。

同年11月、新潟県令として松本を去るまで、情熱をもって教育の普及をすすめる、松本に学校の基礎を築いた。

2) 長尾無墨

幕末・明治の高遠藩士で、号は天雁と言い、田能村

竹田の門をたたき、詩文・絵画を能くした。藩校進徳館が創設されたとき大助教に任じられ、のちに洗馬・大町で漁樵吟社を設立し、子弟の教育にあたった。

前述の永山盛輝権令に随行した際、その様子を書き留めたのが『説諭要略』である。本著の内容は、当時の信州教育の状況を記録したものである。

そして永山は、『説諭要略』を県下に配布した。その結果、多額の元資金が集まり、筑摩県の就学率は全国一と言われた。

その書中には「伊那の座光寺は大きな農家が多くて、純朴なところである。最近山の麓に大きな学校を新築し、美を尽くして出来上がった。建築費用は2000円に上り、郡内一の大きな学校といわれている。

ある日権令はこの学校にやってきて、村人や近くの村の人たちを呼び集めた」とあり、これは県令を囲んで村中で祝宴をし、また他の村の人々に早く学校を作るように励ましたのではないだろうか。

② 大工の棟梁

1) 立石清重

開智学校の設計並びに施工者は、立石清重(1829～1894)である。立石は、当時甲斐の松木輝殿(睦沢学校を施工)、信州佐久の市川代治郎(中込学校を施工)らとともに活躍をしていた。

設計並びに施工に関しては、東京の開成学校や東京の医学校の建物や設計図を参考にしたと言われている。

立石家は、代々大工棟梁職を継ぎ、当時の松本藩へも出入りしていた。立石清重は、号を朝棟と名乗り、特に傑出した棟梁で人々の信望も厚く、性重厚にして、しかも進取の気性に富んでいたようである。

彼は、開智学校のほか洗馬学校(現：塩尻市)、松本裁判所、長野県師範学校松本支校、大町裁判所、長野県中学校松本支校、長野県県会議事堂、東筑摩港と小学校など当時の大建築のほとんどを施工した。

しかもそれからの工事に関する事柄を毛筆で丹念に記帳して、これを子孫に伝え後世に残した。これらは現在、貴重な建築資料となっている。

2) 市川代治郎

市川代治郎について、『佐久の先人』(佐久市の先人検討委員会編)には、次のように記述されている。

「1826(文政9)年に南佐久郡下中込村(現：佐久市中込)石神に名主市川八郎右衛門の次男として誕生した」とある。

そして、「彼は、22～23歳ごろに思うところあって宮大工を志した。京都本願寺の棟梁水口若狭守に入門を許され、ご用役大工の鑑札を受けるなど名工の名の高かった野沢菜鍵屋の小林源蔵昌長空之助に弟子入りし、大いに腕を磨いた。師匠の源蔵が東京築地の西本願寺修復の棟梁に推挙され、他の工匠を指揮した際、代治郎は脇棟梁として重責を担っていた。しかし、1858(安政5)年8月に源蔵が急死したために、代治郎が代わって指揮を取り工事を完成させた。

「この際に知り合った外国人ケルモンに雇われ、1869(明治2)年3月43歳で渡米、カリフォルニア州サクラメントで建築技術を学び、1873(明治6)年6月に帰国した」。このとき彼は、48歳であったらしい。

帰朝後、「たまたま郷里に持ち上がった学校建設計画は代治郎にとって大きな朗報であった。アメリカ在住4年余りの実績には自信があり、当時政府は西洋の模倣を大いに奨励していたから、校舎の設計・施工は、代治郎にとっては故郷に錦を飾る大仕事であった」と言える。その後、中込学校を建てた代治郎は71歳の生涯を、明治29年4月25日に和歌山県有田郡烏屋城村市場(現：有田川町)で閉じたのである。

③ 地域住民

当時の長野県内における学校建設の事業を推進したり協力したのは、何も行政担当者や大工棟梁のみではなかった。学校建設が推進された当初は、民費負担が建前であった。表1-3から見て取れるように、巨額な学校建設などの経費を町村ではどのように調達をしたのだろうか。ここでは、旧中込学校と旧開智学校の経費調達の事例から見ていきたい。

1) 旧中込学校の事例

巨額な学校建設などの経費を、町村ではどのように調達をしたのだろうか。前述のごとく、当初は民費負担が建前であったので、1873(明治6)年1月に布告された文部省からの委託金分配は僅かなもので、しかもこれらが末端にまで支給されたのは1875(明治8)年からであった。

そして、残された請負契約書を見てみると、代治郎と世話役古間菊藏、小林清作、長坂富蔵らが署名、異常に安い人件費(340円)が記されており、次いで、木材・瓦・麻縄・釘・接待費・駄賃に至るまで千二百件にも上る支払い明細は明らかだが、一方代治郎に対する支払いは全く見当たらないそうである。彼はただ働きをしたのであろうか。

学校の建設費は、表1-3の②を見れば6,098円51銭8厘で、それらの大半を村内の寄付金で賄われた。最低でも一戸一円という負担は、当時の農家にとっては決して軽いものではなかった。

しかし、『文明開化という教育を洋風校舎という新しい革袋に盛ることが必要』と洋風校舎の建設を村民に提案し説得した用掛の小林豊次郎や、積極的に資金の拠出をした植松吉郎、小林藤九郎、関口宇兵衛、石山織之助ら資産家の存在なども村民が力を合わせる原動力となり様々な困難を乗り越え、一年を経ずに校舎を完成させた。

表1-4から、下中込村では融資募金と村内土地所有者に対しての賦課金によって賄われたことが理解できる。

2) 旧開智学校の事例

永山権令らの計画した校舎新築の構想は実に雄大で、この地方では、松本城以来の大工事でもあった。校舎新築は筑摩県の強力な指導の下に開始されたのであるが、教育に関わる費用は民費負担という明治新政府の方針により、国や県の補助は皆無の状況下であり、前述の中込学校同様に、学区内全戸の個別献金並びに県官、教員その他融資の特使寄付金及び廃仏毀釈で取り壊した寺の古材売却金などによって調達をした。その時の個別献金簿・得し寄付金名簿は、現在も残っており重要文化財附(つかけり)に指定されている。資金の調達は、明治7年末から開始されたが、献金簿や寄付金名簿に記入されている年代の大部分が、校舎新築竣工の明治9年から明治10年になっている。筑摩県は町内の有力者たちを学校世話役に任命し、戸長や世話役を通して寄付金の徴収を図った。旧開智学校の校舎は、永山権令の熱意と関係戸長や学校世話役の献身的努力並びに学区内住民の深い理解と協力とが一体となって幾多の困難を克服して建築されたのである。これらのことは、今回調査した県内11校全ての学校が建設される際に、大なり小なり起こりえたことである。

表 1 - 3 : 学校建設費 (工事費) に関する一覧

	校名(総面積)	費用	大工棟梁	備考
①	旧座光寺 麻績学校 不明	<u>2,000 円</u> 900 円の不足で、10 年 かけて借金返済 (現在 のお金で 1,057 万円)	名古熊村の小西弥惣太 座光寺の赤羽目辰治郎	明治 6 年 : 米 (10kg) の価格 = 31 銭 平成 12 年 : 3,641 円
②	旧中込学校 267.5 m ²	<u>6,098 円 51 銭 8 厘</u>	市川代治郎	大工の延べ人数は 1360 人で、日当は 25 銭
③	旧開智学校 2,653 m ²	<u>11,128 円 24 銭 8 毛</u> (7 割が松本町民からの 寄付)	立石清重	日当 : 大工 = 22 銭 5 厘 石工 = 25 銭 人夫 = 16 銭 6 厘 6 毛
④	旧格致学校 219.9 m ²	<u>1,381 円</u>	不明	明治 11 年 : 米 10kg = 51 銭
⑤	旧和学校 297.5 m ²	<u>4,301 円 83 銭 4 厘 8 毛</u>	不明	明治 12 年 : 米 1 石 = 7 円 90 銭 人足費 = 1 日 17 銭弱
⑥	旧園里学校 132 m ²	<u>870 円 26 銭 1 厘</u>	不明	日本と西洋を折衷させた様式
⑦	旧作新学校 168.9 m ²	建築費用は不明	大工は名を失した	普請係総代 : 野池善右衛門 普請係 : 小林亀助 倉崎直蔵
⑧	旧山辺学校 不明	建築費用は不明	佐々木喜重 (里山辺の大工)	屋根・壁・木組み 八角棟・出入り口のアー チ式デザイン・腰壁のレンガ調模様
⑨	旧屋代学校 910.8 m ²	<u>3,776 円 31 銭</u>	不明	正面玄関に突き出した車寄せ バーチボ ード 参画破風下板目張りの外壁「障子学校」
⑩	旧下市田学校 554.4 m ²	<u>1,000 円</u>	寺沢佐藤治 玄関部分担当の坂田亀吉	明治 19 年 3 月 8 日火災による焼失 明治 21 年 2 月 19 日新校舎完成
⑪	中野小学校 旧西校舎	建築費用は不明	不明	玄関の寄棟造りの屋根・二階にテラス 大屋根中央部の屋根裏部屋に御真影が掲示

(表 1 - 3 は、本論文作成上収集した資料より、筆者が独自に作成したもの)

表 1 - 4 : 中込学校新築資金の調達方法一覧

番号	献金の種別	具体的献金方法	特記事項
①	郷中献金 2,392 円 55 銭 8 厘	共有財産の処分	1,750 円 5 銭 8 厘
		越国の者より地価百円につき 2 円	366 円 94 銭 4 厘
		その他財源	255 円 55 銭 6 厘
②	個人献金 3,357 円 58 銭	最低 1 戸 1 円 (109 戸)	田畑の持高 (面積) により割当て
		最高 1 戸 565 円 (1 戸) 植松吉郎	
③	村外者の献金 348 円 38 銭	1 円以上、最高 155 円 10 銭	村外地主等に持高による割当て
合計	<u>6,098 円 51 銭 8 厘</u>		

(表 1 - 4 は、「旧中込学校」(佐久市教育委員会) の P10 より筆者が独自に作成)

5. 展望と課題

本論は、現在長野県内に保存されている明治期に建設された小学校から見てくる当時の教育や社会、文化状況等を概観してきた。しかし、調査対象の学校訪問や資料の収集は、滞在日数の関係で思うように捗らなかった。

特に現存している11校の創設の背景や事情等についての、個々の研究書も皆無であり、論述した中には、推測した状況の中で記述した箇所も存在している。

しかし、本論の提出原稿は枚数が規定されている。よって、当時の学校制度、学習内容・教材、日課・校則・罰則・躰、修業年限・試験、教科、教員・児童数、教科書、校名の由来などについても論述する予定であったが、これらの項目については、今後の課題として次回に回すことにした。

今回、2泊3日の予定で長野県下の11校を訪問した。その際に、各校の学芸員等の方々から、筆者のために説明の時間をとっていただく中でご教示頂いたことに対して、この紙面を借りて厚くお礼申し上げたい。

一方、学校によっては耐震工事中や入口が施錠されたまま、荒れ果てた印象をもたざるを得ない施設も存在したことは事実である。明治時代に地域住民の協力によって創設された学校をぜひとも後世に残していただきたい。このことを最後に論を閉じたい。

引用・参考文献

1. 『明治の小学校－教育資料館に見る社会のすがた－』古川修文 2014 修文館研究室
2. 『近代日本の教育』海後宗臣・仲新 1979 東京書籍
3. 『日本の学校』勝田守一・中内敏夫 1964年 岩波書店
4. 『日本の近代建築(上)－幕末・明治編－』2013 藤森輝信 岩波書店
5. 『明治百年教育史』(上)島為男 1968 日本教図
6. 『近代日本教育小史』国民教育研究所 1973 草土文化
7. 『史料日本の教育』神田修 山住正巳 1978 学陽書房
8. 『明治の学舎』中村哲夫・『サライ』編集部 1997 小学館
9. 『日本教育史』山本正身 2014 慶応義塾大学出版
10. 『<県史シリーズ20> 長野県の歴史』塚田正

明 1974 山川出版社

11. 『江戸の教育力』高橋敏 2007 ちくま書房
12. 『江戸の教育力』大石学 2012 東京学芸大学出版会

【パンフレット及び冊子類】

- 1) 「長野県宝 旧座光寺麻績学校校舎」長野県飯田市教育委員会
- 2) 「県宝 旧和学校(記念館)長野県東御市教育委員会
- 3) 「重要文化財 国史跡 旧中込学校(付)旧中込学校資料館」平成16年 長野県佐久市教育委員会
- 4) 「佐久の先人」平成26年 長野県佐久市教育委員会
- 5) 「重要文化財旧開智学校」平成21年 長野県松本市立博物館附属施設 重要文化財級開智学校管理事務所
- 6) 「明治の学舎 下市田学校校舎 高森町有形文化財」長野県高森町教育委員会
- 7) 山辺学校歴史民俗資料館(長野県宝 旧山辺学校校舎) 長野県松本市教育委員会
- 8) 「坂城町格致学校歴史民俗資料館」長野県坂城町文化財センター・坂城町立図書館

[注記]

- 注1) 論文中に掲載された図中の写真は、全て筆者が撮影したものである。
- 注2) 本論中における図表は、収集したパンフレット及び冊子類から抽出し、筆者が独自に作成したものである。